

アザレアのまちに行ってみよう ポラーノの広場は音たちの遊ぶ未来への扉



オペラ ポラーノの広場

台本



原作 宮沢賢治 台本 中村敬一

鳥取オペラ協会

オペラ

ポラーノの広場

原作：宮沢賢治

台本：中村敬一

作曲：新倉 健

登場人物

キュースト氏	Br	撃剣の先生	
ロザーク	Mz	子供たち	
ファゼーク	Sp		
ミーロ	Sp		
山猫	Bs		
巡査	T		
床屋の親方	Mz		
床屋の職人(日)	Sp		
床屋の職人(月)	Alt		
テーモ	Br		
村人1〜7			
合唱			

第1幕

プロローグ

舞台中央に3方を本欄で囲まれた空間。

そこに一客の椅子、髭にも髪にも白いものの混じったキュースト氏が座っている。

ほの暗い明かりの中、彼は語り出す。

遠くにチェロの響き。

舞台遠景にチェロを弾くロザ一口の姿がシルエットで見えている。

キュースト

そのころ私はモーリオ市の博物館に勤めて居りました。

(まじめくさって) 当時の私の身分は……(笑い)……

当時の私の身分は18等官でしたから、役所の中でずうっと下のほうでしたし俸給もほんの僅かでしたが、受持ちが標本の採集や整理で、生まれ付き、好きなことでしたから、わたくしは毎日ずいぶん愉快にはたきました。

(本欄に手を伸ばし一冊の古いノートを取り出す、その表紙には「モーリオ市での記録」と書かれている。それは、日記のようでも、記録のようでもある)

チェロの奏でるメロディに弦楽が寄り添い、弦楽4重奏のようになっていく

キュースト

「イーハトーヴォ」 私はこの街の中央にある緑豊かなヴェドロ公園のすぐ脇の小さな家を借りて、月賦で買った小さな蓄音機と20枚ばかりのレコードをもってそこで暮らすことになりました。

蓄音機をまわすキュースト氏、針の音とともにイーハトーヴォのメロディ

イーハトーヴォ

【イーハトーヴォの歌】

コロス

透き通った風

夏でも底に冷たさをもつ青い空

イーハトーヴォ 僕らの街

美しい森

郊外のきらきら光る草の波

ポラーノの広場

イーハトーヴォ 僕らの街

君は知っているかい？

イーハトーヴォ 僕らの街

「すきとおった風」の合唱が響く中、本棚が開き、椅子を立つキュースト氏。

彼の顔にはすでに髭はなく、髪は白いものもなくなっている。

若々しく希望に満ちたキュースト氏に変身。

本棚と椅子の取り除かれた舞台は、

まるで都会のビル群の中にある公園のように、緑に満ちているが、

遠景には街並み見える。

「イーハトーヴォ」は我々の街である。

やがて、日が昇り散歩を始めるキュースト

キュースト

山羊は山羊
いったい馬のように
いったい犬のように
前いたところへや
来る道を覚えていて
そこへ戻っているということが
あるのかな

合唱

山羊は山羊
馬ではないよ
犬ではないよ
メー、メーはメー、メー
ヒヒーンでもなく
ワンワンでもない

キュースト

でもいったい前いたところへや
来る道を覚えていて
そこへ戻っているということが
あるのかな？

合唱

ありはしないメー、メー
ヒヒーン
ワンワンワン

キュースト

こっちへ山羊が一匹迷ってきたんですが
ご覧になりませんでしたか？

村人

さあ、私どもはこの道を真っ直ぐ歩いてきただけですから。

合唱

山羊は山羊
馬ではないよ
犬ではないよ

キュースト

山羊は山羊

合唱

メー、メー

キュースト

いったい馬のように

合唱

ヒヒーン

キュースト

いったい犬のように

合唱

ワンワンワン

キュースト

前いたところへや

ポラーノの広場

そこへ行くとだれでも上手に歌えるんだよ。
(チェロの響きは広がり、イーハトーヴォの合唱のメロディをオケが奏でる)

キュースト そうさねえ、だけど地図もあるからね。
ファゼーロ 野原の地図ができてるの？
キュースト ああ。
ファゼーロ その地図で見ると道でも林でもみんな分かるの？
キュースト いくらかかわっているかもしれないが、まあ大体はわかるだろう。
ファゼーロ じゃあ、お礼にその地図を買って送ってあげようか。
キュースト うん。
ファゼーロ 君はファゼーロって云うんだね。宛名をどう書いたらいいかねえ。
キュースト 僕、暇を見つけておまえんうちへ行くよ。今日でもいいよ。
ファゼーロ 僕、仕事があるんだ。
キュースト 今日日曜じゃないか。
ファゼーロ いいえ、僕には日曜がないんだ。仕事をしなけりや。
キュースト 仕事って君のかい？
ファゼーロ 旦那のさ。テーマ旦那のさ。みんなもう畦へはいつているんだ。小麦の草をとっているよ。
キュースト じゃあ、君は主人のどこに雇われているんだね。
ファゼーロ ああ。
キュースト お父さんたちは？
ファゼーロ ない。
キュースト 兄さんかだれかは？
ファゼーロ 姉さんがいる。ロザーロって云うんだ。
キュースト ロザーロ。姉さんはどこに？
ファゼーロ やっぱ旦那のところに……
キュースト そうかね。
ファゼーロ だけど姉さんは山猫博士のどこへいくかもしれない。
キュースト なんだい、その山猫博士というのは。
ファゼーロ あだ名なんだ。本当はデストウパーゴって云うんだ。
キュースト デストウパーゴ？ ポー・ガント・デストウパーゴかい。県の議員の。
ファゼーロ ええ。
キュースト あいつは悪い奴だぜ。あいつのうちがこっちの方にあるのかい。
ファゼーロ ああ、僕の旦那の家から見え……
テーモ おい、こらで何をくずくずしているんだ。(鞭をならす)
ファゼーロ もう、一区切りでも働いたかと思ってきてみると (鞭をならす)
テーモ まだ、こんなところに立ってしゃべくりやがる。早く仕事へ行け。(鞭をならす)
ファゼーロ はい、じゃさよなら。
テーモ あなたは、どこのお方だか知らないが、(鞭をならす)
ファゼーロ これからわしの仕事にいらぬお世話をして貰いたくないもんですな。(鞭を手に威圧するように)
テーモ)やいファゼーロ、駆けて行け、馬鹿、駆けて行けつたら。(百姓は再び革の鞭を鳴らす)

ファゼーロは水つぼをもって、去る。その時、行く手に、一人の女性が立っている、それは、ロザーロである。ロザーロはキュースト氏に軽く会釈する。その表情は悲しそうで、そして、美しかった。

キュースト 人を使うのに革鞭を鳴らすなんて乱暴じゃないですか。
テーモ この鞭ですかい。あなたはこの鞭のことをおっしゃったんですか？
キュースト この鞭はね、人を使う鞭ではありませんよ。
テーモ 馬を追う鞭ですよ。あっちへ馬が4匹も行ってますからね。
キュースト ねえ、こんなふうに。ハハハハハ。(百姓はキュースト氏の顔の前で鞭を鳴らして走り去る。)

ポラーノの広場

ファゼーロ 1256！
ミーロ 僕のは2556！
ファゼーロ 3420！
5000まで数えればいいんだ！ ポラーノの広場は、もうじき、そこらのはずなんだけれど。
キュースト 番号なんて当てにならないな。
合唱 行こう行こう。行ってみよう、
ポラーノの広場。
キュースト だって、君らの云うような音はちつもしないよ。
ファゼーロ 今に聞こえるよ、こいつは3866だ。
合唱 行こう行こう。行ってみよう、
ポラーノの広場。
(3人、月の美しさに立ち尽くす。)

キュースト ほ、ほー。月が。
ファゼーロ ほ、ほー。月が。
ミーロ ほ、ほー。月が。

キュースト ファゼーロ、それにミーロよくお聞き！ ポラーノの広場は僕たちの心の中に在るのかもしれないんだ。
ずっとずっと昔から、心の中の広場なのかもしれない？
ファゼーロ ずっとずっと昔から？
ミーロ 心の中の広場？

キュースト ああそうだよ、決してポラーノの広場が空想の広場だなんて云ってるんじゃない。確かにある素敵な広場 いつでも祭りの在るところ。でもそれは僕や君の心の中に在るんじゃないか。僕や君の心の中の響きなんじゃないか？

その時遠くから太鼓の音が聞こえる。続いて人々の喚声、そして、踊りの曲が聞こえてくる)

ファゼーロ ほら、嘘なんかじゃない。
キュースト 誰も嘘だなんて云ってないさ。

山猫のパーティー

「山猫の歌」 山猫が歌うとそれを繰り返す合唱。楽しいようで楽しくない合唱。いつのまにか強引な踊りの曲に。

三人は一目散に音のする方角を目指す
舞台は変わり、広場に円陣を組んで
飲み歌う大人たちの一陣が見えてくる
皆、燕尾服を着て、動物の面を着けている

[賑やかな踊り]

合唱 ドンドドン

ポラーノの広場

ドンドンドン
踊れ、歌え、酒を飲め
ここに無い物は何もない
踊れ、歌え、酒を飲め
全て山猫博士のおごり!?
ドンドンドン
ドンドンドン

[ワルツ]

[デストゥパーゴ万歳]

山猫 おいおい、給仕、なぜ俺に酒を注がんか？
給仕 はいはい、あい済みません。座っておいでだったもんですから。
山猫 座っておいでになっても、立っておいでになっても、我が輩は我が輩じゃ。
(人々は彼の機嫌を取るように立ち上がってグラスを掲げる)
諸君は我が輩のために乾杯しようつと云うんだな。
よしよし、ブ、ブ、ブロージット。
合唱 ブロージット！
(山猫博士が3人に気づく。テーモが耳元で何かささやく、不機嫌そうな一瞥、やがて、テーモが3つのグラスを持って3人に近づく)
テーモ これをやり給え、全て、山猫博士様のお心づかいだけ。
キュースト いや、私たちはね、酒は呑まないんだから、炭酸水でもおくれ。
テーモ 炭酸水はありません。
キュースト そんならただの水をおくれ。
合唱 こいつらなんだ！(2つの意味を込めて)
テーモ いや、山猫博士は人に水をご馳走はなさいませんよ。
合唱 こいつらなんだ！
キュースト ご馳走になろうというんではないんです。
野原の真ん中でつめ草の灯かりを数えてきたポラーノの広場で私は渴いて水が呑みたいのです。
テーモ つめ草の灯かり？ わははは。
ポラーノの広場もな、お気の毒だが山猫博士さまのもんだよ。
合唱 こいつらなんだ！ わははは。
山猫 よしよし、まあ、好きなら水をやっておけ。
しかし、水を呑む奴等が来るとポラーノの広場も少しらっばつくれるね。
テーモ はい。
合唱 はい、山猫博士様。
テーモ ファゼー一口、おまえ何しに来たんだ。早く失せろ。帰ったら立てないくらいひっぱたいてやるからな！
山猫 その子供はなんだ？
テーモ ロザー一口の弟でございます。
山猫 そうか……。

楽隊が、民謡調の曲を始める

[民謡調の曲]

山猫 おいおい、そいつでなしに、あの曲をやるんだ。あの曲を！

民謡調の曲が中断する

突然山猫のダンスが始まる

[山猫のダンス]

皆も彼に会わせて踊るが、あまりの彼の傍若無人な踊りに呆れて、最後は彼だけが踊り回る
やがて、山猫も疲れて踊りやめ、椅子に座る

ポラーノの広場

山猫 おい、注げ！
(山猫、慌ただしく2杯煽る)

村人 おい、ミーロ、お前もせっかく来たんだから、一つ歌って聞かしてくんな。
ミーロ (初め、躊躇っているが、キューストラの進めもあり、思い切って、楽隊の前に進み出て、楽隊に) フローゼントリーをやってください。

楽隊、演奏を始める
[フローゼントリー]

ミーロ けさの6時頃 ワルトラワラの
峠を私が 越えようとしたら
朝霧がそのときに ちょうど消えかけて
一本の栗の木は 後光をだしていた
私は頂の 石に腰掛けて
朝めし堅パンを かじりはじめたら
その栗の木がにわかにか 揺すれだして
降りてきたのは 二匹の電気リス
私は急いで……

山猫 おいおい間違っちゃいかんよ、ワルトラワラに電気リスなど居たはずはない
ミーロ そんなことどうだっていいんだい。(ミーロは壇を降りる)
山猫 今度は吾輩が歌って見せよう。
こら、楽隊、In the good summertimeをやれ！
(楽隊、演奏を始める)

[IN THE GOOD SUMMERTIME 山猫]

つめくさの花の 咲く晩に
ポラーノの広場の 夏まつり
酒を飲まずに 水を呑む
そんなやつらが でかけて来ると
ポラーノの広場も 朝になる
つめくさの花の 咲く晩に
ポラーノの広場の 夏まつり
ポラーノの広場の 夏まつり
酒を飲まずに 水を呑む
酒を飲め
ポラーノの広場も 朝になる
ポラーノの広場も 白っばくれる
(ファゼーロ、壇上に駆け上がって)

ファゼーロ 僕も歌います。今の節です。
山猫 いい度胸してるじゃないか。おもしろい。やってみな。

[IN THE GOOD SUMMERTIME ファゼーロ]

ファゼーロ つめくさの花の かおる夜は
ポラーノの広場の 夏まつり
合唱 ポラーノの広場の 夏まつり
ファゼーロ 酒くせのわるい 山猫が
合唱 山猫さまが
ファゼーロ 黄いろのシャツで 出かけていると
ポラーノの広場に 雨が降る
合唱 ポラーノの広場に 雨が降る……
山猫 何だ、失敬な。決闘だ、決闘だ！
キュースト 馬鹿を云え、貴様が先に悪口を言っておいて。
こんな子供に決闘だなんてことがあるもんか。
おれが相手になってやろう。

ポラーノの広場

山猫 へん、貴様の出る幕じゃない。引っ込んでろ。
こいつが我が輩、名誉ある県会議員を侮辱したんだ。
だから、こいつに決闘を申し入れる。
決闘だ、決闘だ！

合唱 結構だぜ、決闘だ！
蹴っ飛ばせ、決闘だ！
結局、決裂
決着をつけようぜ！

山猫 ピストルか刀だ。お好きなほうでやろうじゃないか。

合唱 決闘、結構、決闘！

山猫 (少し気弱になって) 誰か俺の介添え人はおらんか？

村人 わしは結構！

村人 私はお許してください。

村人 おらあ、とても駄目だよ。

山猫 (やけくそで) どいつもこいつも臆病者め！

合唱 蹴っ飛ばせ。
決闘、結局、決裂、決着を！

山猫 剣か大砲を持ってこい！

給仕 ここは森の中そんな物ははございません。ナイフはいけませんか？

山猫 (安心して) ナイフで結構、決闘だ。

合唱 蹴っ飛ばせ、決闘だ！
結局、決裂。
決着をつけようぜ！
決闘だ、決闘だ！
結構だぜ、決闘だ！

[決闘の間奏]

山猫 あいたたた！ おーい、おーい、やられたよ！
だれか、ヨードホルムをもってないか？ 過酸化水素はないか？ やられた、やられた、やられたよ！

キュースト よく色々の薬の名前を御存知ですね。
だれか、水を持ってきて下さい。

(ミーロが水を持ってきて如雨露でシャーとかける。山猫ずぶぬれになる。)

山猫 我が輩はこれで失敬する。後は、みんな十分やってくれ。
(山猫はほうほういで逃げ去る)

村人 やいファゼー口、うまいことやったな、この旦那は？

ファゼー口 競馬場にいるキュースト氏だよ。

キュースト 一体今夜はどういうんですか？

村人 いいや、山猫野郎、来年の選挙の仕度なんですよ

村人 ただで酒を飲ませるポラーノの広場とはうまく考えたなあ

村人 この春からかわるがわるこうやってみんなを集めて呑ませたんです

村人 その酒もなあ……

村人 そいつは云うな。さあ一杯やりませんか？

キュースト いいえ私どもは呑みません
ファゼー口行こう、帰ろう。

ポラーノの広場

帰路

「ポラーノ広場へ」の行進曲がオーケストラで 寂しげに変奏されるなか、家路に就く3人。

キュースト 君はテーモのところへ帰るのかい？
ファゼーロ 帰るよ、姉さんがいるもの。
キュースト うん、だけどいじめられるだろう。
ファゼーロ 僕が行かなかったら、姉さんがもっといじめられるもの。
(ファゼーロは泣き出す)
キュースト 私も一緒に行こうか？ それとも、私の家にくるか？
ファゼーロ いいよ、大丈夫。テーモは僕をそんなにいじめやしないから。
キュースト 何かあったら、知らせにおいでよ。
ファゼーロ うん、ぼくね、姉さんのことで頼みに行くかもしれない。
キュースト ああいいとも。
ファゼーロ じゃあさよなら。

キューストとファゼーロ、ミーロは別れる。遠ざかるなかで、ファゼーロの口笛が寂しく響く。



第2幕

[間奏曲]

取り調べ

三つ並んだ取調室、奥に警察署長のデスクが見える

ロザーロが舞台前に歩み出て歌う

ロザーロ 夜の湿気と風が寂しくいりまじり、
松や柳の林はくろく
空には暗い業の花びらがいっぱい
わたくしは、はげしく寒くふるえている (春と修羅第2集から)

ファゼーロがあつた山猫博士と出会い
キューストさんが決闘の騒ぎを起こし
それを誰かが是とし
それを誰かが否とし

ポラーノの広場

しかし、地球は回っている
そんなときに
私に何が出来たのだろうか

ロザ一口は取調室に入る

入れ替わりに入ってきたキューストは真ん中の部屋で落ち着きなく歩き回っている

下手の部屋ではロザ一口が巡査に尋問されている 泣き伏すロザ一口

上手の部屋のテーモがぼんやり見えてくる

キュースト

ファゼ一口が居ない。ファゼ一口が居ない。
あの半月の明かりの中
争って勝ったあとのなんとも云われない寂しい気持ちをいただきながら、
ファゼ一口がつめ草の青白いあかりの上に
影を長く長く引いて、しょんぼりと帰っていった
あの日から彼は姿を消してしまった
ああ、あのときなぜ私はそのまま家に帰って眠つたらう、
なぜ、そんな私が居てもたっても居られないはずの時刻に
わけもわからない眠りかたなどしていたらう。
それにあのやさしいうつくしいロザ一口が今、
隣の部屋で脅されたり、鎌をかけられたりしているのだ

巡査がキューストの部屋に入ってくる

巡査

君がレオーノ・キュースト君か
職業、官吏、位階18等官、年齢、本籍、現住、この通りかね
そうです。

キュースト

巡査

では、尋ねるが、君はテーモ氏の農夫ファゼ一口をどこへ隠したのか？

キュースト

農夫のファゼ一口？

巡査

農夫だ。16歳以上は子供でも農夫だ。

君はファゼ一口をどこかへ隠しているだろう？

[四重唱]

キュースト

いいえ、私は一昨夜競馬場の西で別れたきりです。

(独白)

ファゼ一口が居ない。ファゼ一口が居ない。

あの半月の明かりの中

争って勝ったあとのなんとも云われない寂しい気持ちをいただきながら、

ファゼ一口がつめ草の青白いあかりの上に

影を長く長く引いて、しょんぼりと帰っていった。

ロザ一口

(泣き伏した顔を上げ)

ファゼ一口が居ない。ファゼ一口が居ない。

きっと遠くに……、生きていれば。

ずっと遠くに行ってしまったファゼ一口。

テーモ

ファゼ一口の奴めどこに行ったんだ？

デストウパーゴ様も消えてしまった！

ポラーノの広場

巡查

俺も疑われている!?
ファゼーロの奴めどこに行ったんだ?
それだけか?
何か証拠を挙げられるか?
では、尋ねる
白つばくれるのもいい加減にしまえ。
捜索願が出ているんだ。

巡查

舞台は暗くなる 転換

そこに署名したまえ。

間奏曲

セングード市

どこからともなく声が聞こえてくる

撃剣の先生

家の中のあかりを消せい。
電灯を消してもほかのあかりをつけちゃなんにもならん。
家の中のあかりを消せい。

間奏曲が次第に静まりキューストが語り出す

キューストは上着を脱ぎ、その上着の内ポケットから、一枚の出張命令書を出す

キュースト

私はこの通り出張を命じられました。「海産鳥類の卵採集のため、8月3日より28日間イーハトーヴォ海岸地方に出張を命ずる」
そんな訳である番小屋にすっかり鍵をおろし一番の汽車でイーハトーヴォ海岸の一番北のサーモの町に立ちました。
それから毎日、町から町へ、岬から岬へ、岩礁から岩礁へ、
海藻を押し葉にしたり、岩石の標本を取ったり、古い洞穴や模型的な地形を写真やスケッチに取ったり、
そして、それを次々に荷造りして役所に送りながら過ごしました。
その間中海岸の人たちは私のような下級の官吏でもたいへん珍しがって何処へ行っても歓迎してくれました。
沖の岩礁にわたろうとするとみんな船に赤や黄の旗を立てて16人もかかって櫓をそろえて漕いでくれました。
夜には私の泊まった宿の前でかがりをたいて色々な踊りをみせてくれました。
たびたび私はもうこれで死んでも良いとおもいました。
けれども、ファゼーロ！ あの暑い野原の真ん中で今も毎日働いている美しいロザーロ、
そう考えてみると、さあ、我々はやらなければならないぞ、しっかりやるんだぞと、心に誓いました。
そして、8月30日の午頃わたくしは小さな汽船でとなりの県のシオーネの港に着きそこから汽車でセングートの市に行きました。
実はこのセングート市では毒蛾がひどく発生しているのです。

ポラーノの広場

どの家も夕刻からは窓を開けられないのです。
なるほどそれで人道にはたくさんのたき火のあとがありましたし、みんなは包帯をしたり白
い切れで顔を擦ったりしながら歩いていました。

先ほどの取調室が床屋に変わっている

3つの椅子、一つには山猫、真ん中の椅子は誰も座っていない。

山猫 ああ、いけない、いけない、押さえてくれたまえ。畜生畜生。

3人の床屋隣の席のデストゥパーゴの周りに集まる

キュースト しめた！ デストゥパーゴ、私の探していたあの山猫だ。

床屋親方 どこかへ触りましたのですか？

山猫 ここだよ、ここだよ！（と、彼は左目の下を指す）

床屋、フラスコの中の綿をしめらせてその目の下を擦る。飛び上がるデストゥパーゴ。

山猫 なんだいこのくスリは？

床屋 アンモニア2%液。

山猫 アンモニアは効かないって、今朝の新聞にあつたじゃないか。（と、無理矢理椅子から立ち上がる）

床屋 どの新聞でご覧です？

山猫 センダード日々新聞だ。

床屋親方 それは間違いです。アンモニアの効くことは県の衛生課長も声明しています。

山猫 当てにはならん。

床屋親方 そうですか？ だいぶ腫れて参ったようです。

床屋親方ブイと背中を向けキューストの所へ行く

撃剣の先生 家の中のあかりを消せい。

電灯を消してもほかのあかりをつけちゃなんにもならん。

家の中のあかりを消せい。

剃刀を研ぐ音、ハサミの音がクロスして聞こえてくる

3人の床屋が交代でかみそりを当てたり、はさみを使いながら歌う

[3重唱]

床屋親方 さてお待たせしました、旦那、御髪はこの通りの型でよろしゅうございますか？

キュースト ええ……

床屋親方 どうだろう？ お客様はこの通りの型で良いとおっしゃるが。

床屋職人1 はてさて。

床屋職人2 なになに。

床屋親方 君たちの意見はどうだい。

床屋職人1、2 ふーむ。

床屋親方 どうだい？

床屋職人1 さあ、どうかね？

お客様の顎は白くて

床屋職人2 白くて

床屋職人1 それに丸くて

床屋職人2 丸くて

床屋職人1 たいへん大人しくいらっしゃるんだから。

床屋職人2 おとなしくていらっしゃる。

ポラーノの広場

床屋職人1 だから、やはりオールバックよりはネオグリークのほうがいいじゃないかな
床屋職人2 うん、僕もそう思うね。オールバックでなくてネオグリーク
床屋親方 いかがでございます。ただいまの御髪の型よりは、ネオグリークの方がお顔と調和いたし
ますようでございますが。

キュースト そうですね、じゃあそう願いましょうか。
床屋全員 かしこまりました。
床屋親方 ちよきちよき
床屋職人1 ちよつきんちよつきん
床屋職人2 さくさくさく

(途中からデストゥパーゴのぼやき加わる)

山猫 ぶつぶつ、ひりひり、なんてこった。失敬じゃないか。この店を訴えてやる。
床屋親方 さあ、もう一分だぞ。電気のあるうちに大事なところは済ましちまえ。
床屋職人1、2 心得ております。
床屋親方 それから、アセチレンの仕度はいいか？
床屋職人1、2 すっかり出来ています
床屋親方 持って来い 持って来い 明かりが消えてからじゃ遅いや
床屋職人1、2 心得ております。

(倍速で)

床屋親方 ちよきちよき
床屋職人1 ちよつきんちよつきん
床屋職人2 さくさくさく
床屋親方 さあ、どうかね？
床屋職人1、2 ちょっと見せてくれ
床屋全員 いいようだね。

(鏡でキューストの顔を映しながら)

撃剣の先生 家の中のあかりを消せい。
電灯を消してもほかのあかりをつけちゃなんにもならん。
家の中のあかりを消せい。

山猫がブツブツと立ち上がる

床屋親方 旦那、腫れはひきましたか？
山猫 もう結構だ。
首から布を取り去ると床に投げつけ、コインを床に放り出し、外に出る

床屋全員 またのお出でをお待ちします
キュースト ありがとう。(と、金を払うと店を出、デストゥパーゴの後を追う)
床屋全員 ありがとうございます。またのお出でをお待ちしています。

撃剣の先生、子供たち 家の中のあかりを消せい。
電灯を消してもほかのあかりをつけちゃなんにもならん。
家の中のあかりを消せい。

店の前への路上で

キュースト デストゥパーゴさん。しばらくでしたな。
山猫 ……
キュースト ファゼー口を訊ねて参ったのですが、どうかお渡し願います。
山猫 それは誤解です、誤解です。
あの子どもは私はしりません。
キュースト それなら、あなたはモーリオ市を離れて、何故こんな所に居るのです。
イトハーヴォの警察ではファゼー口と一緒に貴方もさがして居るのです。

山猫

もうすっかり手配はついています。こんやはどうなってもあなたは捕まります。
ファゼーロは何処にいるのです？
そんなはずはない。そんなはずはない。名誉にかけて、紳士の名誉にかけて
わたくしがここへ人を避けて来ているのはまったく違った事情です
あの林の中で私が社長になって木材乾溜の会社をたてたのですが、
薬品の価格の変動で欠損になって
どうにもやっていけなくなった。
もちろん、あの事業に全財産を賭してあります。
そこで今度は醸造所にしようと言うことになった。
そこで、試験的に酒を醸造してみた、ところが、それを税務署に届けていなかったもんで
それをネタに部下の者が脅迫しました。
あの晩は実に難しい場合だったんですよ。
あそこに来ていたのは株主です。反感を買った株主達をあそこでもてなしていた。
わたしもやけそになってああいう風に酔っていたのです。
そこにあなたが出てきたのですからなあ。
今は私はまったく収入の道もないのです。
どうか了解してください。

キュースト

山猫

キュースト

わかりました。けれどもあのファゼーロはどうしたろうなあ。
あの子どもはきっとどこかで何かしていますぞ。警察の御厄介になるような何かを。
私は帰ります。あなたはこの町を立ち去られた方がいい。
私は帰って警察で、この事情を云わないわけには参りませんから。

山猫はしょんぼりうなづく

山猫

キュースト

立ち去る山猫、一人残るキュースト

静かにチェロのメロディーが聞こえてくる



第3幕

再会

プロローグと同じ、キューストの書斎

キューストは本を広げている

キュースト

ファゼーロの口笛が響き現れる

キュースト

ファゼーロ

キュースト

ファゼーロ

キュースト

ファゼーロのアリアの間にポラーノの広場のテーマが鳴り始める

ファゼーロ

ああ、どうしたんだ、君はずっと前から居たのかい。
僕はね8月の10日に帰ってきたよ。
僕は海岸へ出張していたんだ。
今夜ね、僕らの工場へ来ておくれ。
君らの工場？
僕はねセングードの町の革を染める工場へ入っていたんだよ。

ポラーノの広場

あの晩、僕はどうしても家へ入れなかったんだ。
そして、家を通り越してもっと歩いていった。
すると、夜が明けた。
僕が困って座っていると、革を買う人が通ってその車に僕を乗せて、食べ物くれた。
それから僕はだんだん仕事を手伝ってとうとうセンダードへ行っただ。
あっちで技師の助手をしたんだ。
すると、その人が何でも教えてくれた。薬もみんな教えてくれた。
もう革のことならなめすことも色を着けることでもなんでもできるよ。
キュースト　そしてどうして帰ってきたの？
ファゼーロ　警察から探されたんだよ。でも、もうどこへ行ってもいいから勝手にしろって。
キュースト　そうしたら、ここの年寄り達がムラードの森の工場で革の仕事をしろというんだ。
できるかい？
ファゼーロ　できるさ。それにミーロはハムを^{しら}拵えてくれるからな。みんなでやるんだよ。
キュースト　姉さんは？
ファゼーロ　姉さんも工場へ来るよ。
キュースト　そうかね。
ファゼーロ　さあ、行こう、今夜も誰も来ているから。
ポラーノの広場の歌が一段と強くなる
キュースト　よし、行こう！
ファゼーロとキューストはポラーノの広場を目指して出かける

合唱　行こう行こう。行ってみよう、
ポラーノの広場。
村人　やお前さん帰ってきんしゃったね。
まず、ご無事で結構でした。
キュースト　ええ、ありがとう。ファゼーロも帰ってきてすっかり元の通りですね。
村人　山猫博士がいませんや。
キュースト　山猫博士？
デストウパーゴ？
デストウパーゴに私はセンダードで会いましたよ。
大変に落ちぶれて気の毒なくらいだった。
村人　いいえ、デストウパーゴが落ちぶれるものですか。
大将、センダードの町にたくさん土地を持っていますよ。
キュースト　はてな、財産はみんなあの乾溜会社にかけてしまったと云っていたが。
村人　どうして、どうして、あの山猫がそんなことをするものですか。
あなたはよっぽどうまくだまされておいでですよ。
あの工場からアセトンだといって樽詰めにして出したのは
みんな立派な混成酒ですさあ。
村人　悪いのには木精もまぜたんです。その密造なら2年もやっていたんです。
キュースト　じゃあ、ポラーノの広場で使ったのもそれか？
村人　そうですとも。いや、何と云っても大将はずるいもんです。
みんなに弱みがあるから、まあこのまま泣き寝入りでさあ。
ファゼーロ　さあもう行こう！
そら、あそこにひとつ、あかしがあるよ！
二人たちどまる。ファゼーロが静かに歩み出て指す先につめくさが一輪咲いている。
それを取り上げるファゼーロ、一人深呼吸をするキュースト
キュースト　ふう、秋になったね。
ファゼーロ　途中の明かりはみんな消えたけれど……

ポラーノの広場

キューストはファゼーロの傍らに歩み寄る

キュースト まっすぐだよ、まっすぐだよ。
わたくしはあれから何遍も来て分かっているから。

ファゼーロはかすかにうなずいてまた歩き始める

ミーロ どうとう来たな。今晚は、いいお晩でございます。

皆、大きく笑う

人々彼らを取り囲む

ファゼーロ それでは始めよう。はじめに、僕が云うよ。

人々は座る、その中心にファゼーロが立って

僕らはみんなで一生懸命ポラーノの広場を探したんだ、一緒にもっと幸せになろうと……

やっとの事でそれを探すとそれは選挙につかう酒盛りだった。

本当のポラーノの広場はそんならどこに行ったのだろう。

まだ、どこかにあるような気がして仕方がないんだ。

合唱 dah-dah-sko-dah-dah !

それは、いま、僕らの胸の中にあるだけだ。

僕らは僕らの手でそれを拵えようではないか。

合唱 dah-dah-sko-dah-dah !

ファゼーロ そうだ。あんな卑劣なみつももないわざと自分をごまかすような

そんなポラーノの広場でなく

そこへ夜行って歌えば、またそこで風を吸えば

もう元気がついてあしたの工作中から一杯勢いが良くて面白いような

そういうポラーノの広場をぼくらみんなで拵えよう。

合唱 dah-dah-sko-dah-dah !

ファゼーロ 僕はきっとできると思う。なぜなら僕らがそれをいま考えているのだから。

人びとは沸き立ち、拍手したり叫んだりする

ミーロ さあ！よしやるぞ！今夜は新しいポラーノの広場の開場式だ！

村人 それでは、「さあけを飲まずに水をのむうーっ」とやるか！

みんな、どっと笑う

ミーロ では僕が歌うぞ！“ポラーノの広場の歌”

つめくさの花の 終わる夜は

合唱 ポラーノの広場の 秋まつり

ポラーノの広場の 秋のまつり

ミーロ 水を飲まずに 酒を飲む

そんな奴らが 威張っていると

合唱 ポラーノの広場の 夜が明けぬ

ポラーノの広場も 朝にならぬ

合唱 dah-dah-sko-dah-dah !

ファゼーロ 俺も歌うぞ！

つめくさの花の しぼむ夜は

合唱 ポラーノの広場の 秋まつり

ポラーノの広場の 秋のまつり

ファゼーロ 酒癖の悪い 山猫が

黄色なシャツで 遠くへ逃げて

合唱 ポラーノの広場は 朝になる

ポラーノの広場は 夜が明ける

合唱 dah-dah-sko-dah-dah !

村人 何をしようといっても、ぼくらはもっと勉強しなくてはならないと思う。

合唱 dah-dah-sko-dah-dah !

村人 でもどうしてそれを始めたらいいか僕らにはまだ分からないのだ。

ポラーノの広場

合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
村人 町にはたくさんの学校があって、そこにはたくさんの学生がいる。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
村人 その人達はみんな一日一ぱい勉強に時間をつかえる
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
村人 でも僕らには一日3時間の勉強の時間がない。
村人 それもたいていは仕事に疲れて眠いのだ。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
キュースト 諸君、諸君の勉強はきつとできる。きつとできる。
町の学生達は勉強している。けれども、何のために勉強しているかをもう忘れている。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
キュースト 先生の方でもなるべくたくさん教えようとして、まるで、生徒の頭を疲れさせ、ぐったりさせている。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
キュースト 向こうは何年か専門で勉強すればあとはゆっくりそれで暮らして
酒を飲んだり、家を持ったり、
そしてだんだん勉強しなくなる。
こっちはいつまでもいまの勢いで一生勉強して行くのだ。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
村人 酒を呑まないことで酒を呑むより一割、余計力を得る。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
村人 煙草を飲まないことから二割、余計の力を得る。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
キュースト そうだあの人達が女のことを考えたり、
お互いの間の喧嘩のことでつかう力をみんな
僕らの本当の幸を持ってくることにつかおう。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
キュースト 見たまえ、諸君はまもなくあれらの人たちに比べて倍の力を得るだろう。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
キュースト 僕らは(黙って)やっといこう。風からも光る雲からも諸君には新しい力が来る。
全員合唱 僕らはやっといこう。風からも光る雲からも諸君には新しい力が来る。
そして諸君(僕ら)はここへ、
この野原へ ほんとうのポラーノの広場をつくるだろう。
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
ミーロ 「キュースト！おまえも僕達の仲間に入れておくれ！」
ファゼーロ 「そうだ！ロザーロ姉さんを貰ったらいいや！」
人びとは祝福し沸き立つ
ファゼーロ 「さあ叫ぼう！あたらしいポラーノの広場のために、万歳！」
全員 「万歳！」
合唱 dah-dah-sko-dah-dah !
人びとが希望に沸き立つ中で、ひとりキューストが孤立して、ゆっくり人びとから離れていく
合唱 つめくさ灯ともす 夜のひろば
むかしのラルゴを うたいかわし
雲をもどよもし 夜風にわすれて
とりいれまちかに 年ようれぬ

まさしきねがいに いさかうとも
銀河のかなたに ともにわらい
なべてのなやみを たきぎともしつつ

ポラーノの広場

はえある世界を ともにつくらん

町の騒音か？ 巨大な音響が皆の合唱を包んでいく

町の騒音か？ 巨大な音響が皆の合唱を包んでいく

舞台は次第に暗くなっていく。遠ざかるようにポラーノの広場の歌が徐々に小さくなっていく

かわりに騒音が包んでいく。そして、大音響。

エピソード

舞台は現代のトキーオ。

キュースト、ファゼーロ、ミーロ、ロザーロ、山猫、テモ、皆、それぞれ現代の通行人になっている。

再び少しばかり、白いものを混じらせた髪と髪で立っている。古いノートを広げて語り出す。

遠くでかすかに町の騒音がSEとして聞こえている

キュースト

それから7年たったのです。

ファゼーロ達の組合ははじめはなかなかうまく行かなかったのですが、それでもどうにか面白く続けることができたのです。

私はそれから何遍も遊びに行ったり相談のあるたびに友達に聞いたりして、それから3年の後にはとうとうファゼーロ達は立派な一つの産業組合をつくり、ハムと皮類と酢酸とオートミルはモーリオ市やセングード市はもちろん、広くどこへも出るようになりました。

そして、私はその3年目仕事の都合でとうとうモーリオ市を去るようになり、私はそれから大学の助手にもなりましたし、農事試験場の技手もしました。

そして、昨日この友達のない、賑やかながら荒んだトキーオ市のはげしい輪転機の音の隣の部屋で私は受け持ちになる50行の欄に何か物珍しい博物の出来事を埋めながら一通の郵便を受け取りました。

音楽は弦楽四重奏で「つめくさ灯ともす」のコラールを静かに奏で始める

それにはひとつの厚い紙へ刷ってみんなで手に持って歌えるようにした楽譜でした。

それには歌が付いていました。

ポラーノの広場の歌……

その譜たしかにファゼーロがつくったのだと思いました。

なぜならそこにはいつもファゼーロが野原で口笛を吹いていたその調子が一杯に入っていたからです。

けれどもそれをつくったのはミーロかロザーロかそれとも誰か、私には見分けがつきませんでした。

合唱

すきとおった風 夏でもそこに冷たさをもつ あおいそら

イーハトーヴォ ぼくらのまち

うつくしい森 郊外のぎらぎら光る 草の波

きみは知っているかい

イーハトーヴォ ぼくらのまち

やがて誰からともなく「つめくさ灯ともす」のコラールを歌い出す

合唱

つめくさ灯ともす

夜の広場

むかしのラルゴを

歌いかわし

雲をもどよもし

夜風にわすれて

とり入れまぢかに

年ようれぬ

ポラーノの広場

まさしきねがいに
銀河のかなたに
なべてのなやみを
はえある世界を

いさかうとも
ともにわらい
たきぎとしつつ
ともにつくらん

やがて、歌声も小さくなり、弦楽四重奏に
そして、チェロの響き一本になってやがて消え入るように幕となる

